

平成 27 年度 博士学位請求論文
日本仏教における因果応報の研究

論文要旨

新田 章

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は「前世の観念」という随筆で、明治時代の日本人とその考え方について、西洋人との一番の違いを「前世の観念」にある、と述べている。仏教や神道に関する彼の文章は現代日本人にも新鮮な驚きを与えてくれる。それと同時に、かなりの違和感をも。新鮮な驚きの方は、彼が見聞して書き記した当時の風俗・風習のほとんどが現在では廃れてしまっており、それらの失われた過去を彼の見事な筆致で読むことができるためだが、違和感とは、ハーンの記す「前世の観念」や「因果応報」は精々遡るとしても江戸時代までで、中世や古代にまで遡らせることはできないのではないか、また「因果応報」という語も時代によるニュアンスの違いがあるのではないか、ということである。

私見によると、インド発祥、中国・朝鮮経由で伝来した仏教が日本人の精神に浸透してゆくにつれて輪廻転生・因縁・無常・往生などの仏教的諸観念が絡み合い、日本独特の語（宿世・報い・前の世の契り・前の世の報いなど）を生み出しながら、幾多の物語の中でごく自然に用いられるようになってゆく。時代の違いによって、また文学ジャンルの違いによって、これらの諸観念のどれに重点が置かれるかは違うが、これらに通底する最も根本的な観念は、やはり「因果」であった。

仏教的な「因果」つまり「因果応報」とは、要するにこうである。——現実には善人が滅び、悪人が栄える不条理に満ち満ちているように見えるが、これは現世に限るからそう見えるだけなのだ。理不尽なことなど、実はどこにもない。なぜなら、これを三世（前世・現世・来世）の業の報いという広い観点から見れば、善因善果、悪因悪果、正しくは善因樂果、悪因苦果はちゃんと貫徹されているからだ。善人は前世の善い行ないのゆえに、死後は天に生まれるか再び人に生まれることができるが、悪人は前世で犯した罪のゆえに、地獄・餓鬼・畜生道の悪趣に堕ちざるをえない。因果応報とはそういう教えである。つまり、これは飽くまでも道德なのであって、煩惱具足の衆生を悪行から遠ざけ、道德的善へと導く方便に他ならない。なぜこれが道德にすぎないのか。それと言うのも、仏教とは本来、この因果応報・業報輪廻そのものの「解脱」を、つまりは「成仏」（ブッダ・覚者に成ること）を示す道だからである。それは道德性の次元を超越した宗教性の次元に立つ教えであるから、仏教本来の救済は衆生を道德的な善へではなく、宗教的な善としての成仏へこそ導くべきものである。とすれば、因果の超脱としての成仏という契機を欠いた単なる因果思想の流布は仏教道德の浸透とは言えても、結局は仏教の世俗化にすぎない。

それでは日本の場合はどうか。

そもそも仏教は伝来当初の日本人にとっては外来宗教であった。それが在来の神祇信仰と対立・統合・分離を繰り返しながら日本仏教として形成され展開し浸透してゆくのだが、他方、土着の神祇信仰もまた仏教との関わり合いの中で、やがては神道を形成するに至った。周知の通り、これを「神仏習合」と言う。だがここで誤解してならないのは、神仏習合とは、

仏教と神道という 2 つの既成宗教が存在していてそれが統合したということではなく、外来宗教にすぎなかった仏教は神祇信仰との接触により「日本仏教」として、他方、在来の神祇信仰も仏教との接触により「神道」として形成されてゆく、その 2 重の過程を意味するということである。だから現在の神道も中世末期頃に確立をみるのであって、古代から今のよ
うな姿をしていたわけではない。本稿「第 1 章 神と仏」は、こうした神と仏との関わり合
う過程とそれにまつわる諸問題を追究する。

こうして展開・浸透してゆく「日本仏教」には、インド仏教や中国仏教とは異なる特色があるはずである。現在、日本で信者数の多い仏教の宗派は、古代から盛んだった密教系と浄土教系の 2 つの系統に、鎌倉時代に中国から輸入された禅宗系、そして日蓮宗系の 4 系統に分けられると思うが、これら諸宗派の歴史を教学面から見てみると、古代に属する平安時代から中世へと、旧仏教も含めていずれの宗派も「密教化」の方向を辿った。ここに密教化というのは、正確に言えば「本覚思想」（気の遠くなるほどの時間を輪廻しながら修行を積んでいつかは成仏するというのではなく、煩惱具足の凡夫は本来仏である、現世で成仏できるという教えで、仏性・如来蔵、即身成仏、煩惱即菩提、生死即涅槃などをキーワードとする）へ傾斜したということなのだが、遂には極端な例として、凡夫こそが本仏であるから修行は不要と説く「天台本覚思想」となって結実する。これはこれで仏教教学の最高到達点であり、中世の芸道の成立を促した点でも無視できないが、鎌倉新仏教の祖師たちを始めとして、以後の仏教は何らかの形で天台本覚思想との対決であったと見てもよいほどである。それでは、この日本仏教の傾向を因果思想という観点から見ればどうなるか。これを教学面に限って追究することが「第 2 章 日本仏教の展開」の課題を構成するのだが、即身成仏や頓悟を説く密教・禅はともかく、娑婆—浄土、此岸—彼岸、凡夫—弥陀仏の二元論に立つはずの浄土教系諸宗でさえ因果各別ではなく、因果の超脱としての因果同時、因果不二を根本的立場とすること、そしてこの傾向は元を糺せば聖徳太子の仏教受容に端を発していることが示される。

ところが、戦国時代から近世・近代へと経過する過程で、この「日本仏教」の清華は衰退を余儀なくされ、古代へと逆戻りするかのよう因果応報が倫理・道徳として定着するに至る。このことには勿論、幕藩体制下での仏教統制が関係しているのだが、同時に神道、キリシタン（キリスト教）、儒教、国学などの宗教・思想との関係が重要な要因となっているように思われる。そこで「第 3 章 近世思想と因果応報」では、近世仏教がこれらの様々な要因との関係の中で因果思想を展開するに至った過程を論じ、最終的に、仏教がその過程で何を見失ったのかに論及する。

ところで「日本仏教」と「因果応報」という本稿のテーマであるが、これまでもこの種の研究は夥しい数に上る。それではなぜ改めてこれを論ずる必要があるのか。勿論、幾つか理由があつてのことである。第 1 に、従来このテーマは時代別、人物別の個別研究がほとんどで、統一的視点から為されたことがないこと。第 2 に、日本仏教で「因果」という場合、伝統的神祇信仰時代からの「あの世—この世」の二元論的他界論を換骨奪胎した浄土教（地獄—極楽）に関するものがほとんどであり、密教、天台本覚思想、或いはまた禅宗や日蓮宗の因果観・他界観が視野に入っていなかったこと。第 3 に、日本仏教の展開を考える際、専ら「仏教史」という視点から、しかも僅かに神道との関係のみが論じられることはあつても、儒教、国学、キリスト教などの諸思想・宗教との関係を含めた「宗教史」という総合的視点

から論じられたことは一度もないこと。第 4 に、因果論において最も卓越した思想であると思われる鎌倉新仏教の〈因果超脱〉の論理を視野に入れず、俗信・迷信及び現代の新興宗教の教義のみに定位した論考がほとんどであること。最後の点に関して付言すれば、上述の通り、仏教とは本来「ブッダに成ること」を説くものであるはずである。とすれば仏教は「三世因果」或いは「業報輪廻」の切断・超脱の教えであるはずである。因果応報が迷える衆生の有り方に基づく世俗的道德にすぎない以上、この観念だけが日本人に幅広く受容されてきたということは、日本人の仏教観からその一番肝心な部分がスッポリと抜け落ちてしまっているということであろう。

近世仏教の民衆教化は、確かに「因果応報」を「倫理・道徳」として説くことに主眼が置かれていた。だが、民衆はその底意を見抜いていたのである。仏教の民衆化とは仏教による民衆の愚民意識の産物でもあったのである。それでは「宗教」としての仏教とは何であるのか。究極の問題はそれであろう。また、そもそも「因果」は人間の存在・認識構造に根ざした観念であるから、因果の超脱を説く仏教の論理を辿ることには哲学的にも大きな意味がある、と言わねばならない。私が本稿で「因果」という問題を考える場合、宗教哲学的立場に立つ所以である。

